

正宗白鳥全集

第三卷

正宗白鳥全集

第三卷

小説三

新潮社版

正宗白鳥全集 第三卷

昭和四十年十月三十日 發行
昭和五十一年八月三十日 セット版

全十三卷セット定價五二〇〇〇圓

著 者 正 宗 白 鳥

發 行 者 佐 藤 亮 一

印 刷 所 大日本印刷株式會社

製 本 所 新宿加藤製本

發 行 所 株式會社 新 潮 社

162 東京都新宿區矢來町七一
電話 業務部〇三三六五一一
編集部〇三三六五四一一
振替 東京四一八〇八番



亂丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さる。送料小社負擔にてお取替へします。

正宗白鳥全集

第三卷

編集

中島河太郎

山本健吉

中村光夫

小林秀雄

監修

河上徹太郎

第三卷 目次

悪　　夢……………	九
尾花の蔭……………	二六
人さまざま……………	三三
團菊死後……………	三七
梅檀木橋……………	三八
冬　　の　　日……………	三七
迷　　妄……………	一〇三
馬鹿の清吉……………	一〇七
亡夫の情人……………	一三七
生まざりしならば……………	一五七
江島の墓……………	二〇〇
人を殺したが……………	二〇七
衰頽時代……………	二〇三
ある日本宿……………	二三四
コロン寺縁起……………	二四六

六十の手習ひ	三六四
世界人	三七七
髑髏と酒場	三八四
故郷	三九六
二人の樂天家	四〇四
藪睨み?	四一六
今年の春	四二三
陳腐なる浮世	四三七
絶望から希望へ	四六三
かかづらひ	四七三
等々力通ひ	四七九

解題	中島河太郎	四八五
----	-------	-----

小說
(三)

悪夢

一

飯田町のある大きな婦人科病院に職を奉じてゐる豊村久は、妻には勿論のこと、同僚にも部下にも、絶対に氣取られないやうにしてゐる情婦の軀江を連れて、土曜から日曜にかけて大磯で遊んだ。この春以來、箱根とか鎌倉とか稻毛とか、東京近くの一晩泊でゆつくり遊んで來られるやうな土地へ、屢々二人連れで出掛けて、心置きなく若々しい戀を樂んでゐたのであつたが、今度はさうは行かなかつた。

相手に語られないやうに、努めて快活にふるまつてゐた彼れも、稍々もすると鬱陶しい物案じ顔になるので、女らしい猜疑心の乏しい軀江からも屢々疑ひの目を注がれた。

『今日は何か恐ろしいことをあなたから聞かされさうな氣がして心配でならないわ。でも、後生だから、今日は恐ろしいことは何にも仰有らないやうにして下さいね。折角こないい所へ來てゐながら、厭な思ひをするやうぢや全く詰らないんですもの。あなたとつてさうでせう。どうしても私が心得て置かなきゃならないことがあるのなら、東京へ歸つた後でお手紙で知らせして下さいな。さうしたらお手紙をよく讀んでよく考へて見ますわ。……此方にある間は一言の半分でも不愉快なことは耳の中へ入れたくないの。明日は明日の風が吹くでせうけれど、今日は日本晴のいゝ氣持で、この上もない幸福な女のつもりで、あなたの側で遊んで暮してゐたいと思つてゐますの。……だから、そんな機嫌の悪い顔なさらないでね』

松林を後にした砂山の斜面に脊を凭らせて足を伸してゐる軀江は、柔しい願ひを籠めたやうな目付で男を見上げながら云つた。晩秋の夕日はあり／＼と砂を照らし二人の顔を照らしてゐた。濤聲は他のすべての物音を没して、周圍には人影が見えなかつた。

豊村は女の願ひに答へる前に、目元や口ばたに微笑を浮べたが、それはいかにも技巧的だつたので、見詰めてゐる女の目に快い感じを與へるものではなかつた。

『あなたは黙つて芝居してゐらつしやるのね。そんな同情は

私きらひよ。……さういへば先つき嶋立庵の前で活動寫眞の極板を仕込みに來てゐた役者の様子と云つたら。何だつてあんないやな風をするんでせう。私これまでも活動は好かなかつたんですけど、今日あれを見たので、一生活動なんかは見なくつてもいいと思ひましたのよ』

『僕も同感だ。活動寫眞だの芝居だのと、大變面白いものゝやうに世間では思つてゐるが、僕等には理解出来ないよ。かうやつて、大海の波でも空の雲でも見てる方がどれほど面白くつていゝ氣持だか知れやしない』

豊村は心に蠕くもつてゐる陰鬱不穩な思ひを振拂つて、新たに大海に眼をそゝいだ。二三の漁船が幾挺もの艀を立てゝ波を切つて、陸の方へ急いでゐた。

『あなたもさう思つて？ だから、明日の晩歸る時刻が来るまでは東京の事は忘れてしまひませう。東京といふ言葉を口に出してさへ、目の前が暗くなるやうで、私脅かされるんですから、この上私を脅かすやうなこと決して仰有らないやうにね』

『僕は決してお前を脅かさうと思つてやしないさ。人を脅かすどころぢやない、僕自身がどうかして脅かされなくて、毎日を過ごして行きたいと思つてるんだ。……今偶然活動役者の話が出たが、僕は先つき牡丹燈籠の芝居の舞臺を思出してゐたんだよ。この夏一緒に帝劇を觀に行つた時にやつてゐた

あれなんだがね』

『へえ。不思議ね。あなたが芝居の事を思出すなんて滅多にないことですね。あの幽霊なんかの出る芝居、あの芝居の何處があなたのお氣に入つたんでせう』

『氣に入つたから思出した譯ぢやないが……』と云つて豊村は言淀んだ。幸手堤のお峰殺しの場が、觀てゐた時よりも今になつて却つて痛切に目に映つて來るのであつたが、そんなことは無論明らさまには云はれなかつたので、『あの晩は銀座から日比谷を散歩して、アイスクリームを飲んだりしてゐるうちに、偶然帝劇へ入つて見る氣になつたのだね。一幕でもいゝから久振りに帝劇を見たいとお前が言出して入つて行くことになつたのだつたが、いざ見るとなると後をひいて、つまり大詰まで見てしまふことになつたのだね。誰れが何をやつたのやら、役者の名も役の名も僕は太抵は忘れてゐるが、お前はよく覚えてゐるだらう。女は芝居や役者のことにかけちや随分記憶がいゝやうだから』

『さうでもないわ。芝居小屋のやうな雑沓ざつさつの中で大切な晩をフイにしたのを後悔したことは今でもよく覚えてゐるけれど。……先きの事が不安心であるのなら、あなたに會つてゐる間は一刻でも粗末にするのが惜しくつてならないんですの』

先きの事を不安心に思つてゐる譯を、彼女が口に出して云

はないのは何時もの通りであつたが、明らかに云はれないため却つて豊村は不安焦燥の思ひに堪へられなくなるのであつた。これほど邪氣なく女の方から戀ひしてゐながら、末永く添遂げる望みのないのを諦めてゐるらしいのが豊村には不思議に思はれて、をりくは女の眞心が序深く疑はれてならないのであつた。藝者などの賣女にも二度や三度は關り合つた経験はあるし、職掌柄女といふものについて、人並以上に知つてゐるといふ自惚も持つてゐる彼れも、一年近く初戀同様の思ひをして馴れ親しんでゐる軈江の心持は充分に呑込めなかつた。妻のある男と知つてゐながら容易にその戀を容れた彼女は、早晚二人の縁を斷たねばならぬ破目になつたら、たやすく別れを告げる氣であるのであらうか。……

さう思ふと、邪魔者である妻の方へ憎惡の目が向けられた。軈江にはまだ知らさないのだが、二人の戀もこのまゝでは最早續けられないやうに危いところまで壓付けられてゐるのである。

『あなたはまた黙つて考へてらつしやる。いやになつちまふわ。私が側にゐてもそんな澁い顔してらつしやるのなら、私一人で宿へ歸つちまひますよ。よくつて?』

軈江は不機嫌らしい口調でさう云つたが、寢心地のいゝ砂の寢床を離れかねてゐた。ふと、青い顔した若い男がステツキを持つて砂山の蔭から現はれて波打際をトボくといふ

た。遅ましい犬がその後に隨いてゐた。

『ぢや、僕も宿へ歸つて湯にでも入ることにしよう。歸りは海邊を傳つて行かうか。お前は先きへ此處を驅けて下りて御覽。裸足で下つて下りるといゝ氣持だよ』豊村は再び心を取直して快活に云つた。その瞬間、夕日を載せた雲は濃淡暗明の美を極めて磯に碎ける波頭は發刺の氣に満ちてゐた。

『私の砂じりを見てひとりで笑つてゐようと思つてゐらつしやるの? 私一息であの波の側まで駆けて行けてよ。直ぐにあの人を追越して見るわ』

軈江は足袋を脱いで、草履と一緒に男に托して置いて、立上りざま、一二三と調子を取つて、勇ましく砂山を駆け下つた。その生々した後姿に目を凝らしてゐた豊村は、満身の血の涌立つやうな思ひをした。今までとはちがつた戀しさ可愛さを新たに軈江の五體の上に感じた。白い泡の吹寄せてゐる濕つた砂の上に白い足を印して、裾をか上げながら此方を顧みたら軈江の樂しげな顔付は、この世の者としてはあまり美くし過ぎた。をりくは汚らしい生物としてのみ女を見てゐた豊村は、その軈江ばかりは女といふ者の仲間へ加へるのがわれないが無駄なやうに思はれた。

白い手で招いた。唇が動いた。聲はよく聞取れなかつたが、笑ひを含んだ兩眼は今日の今の幸福を語つてゐた。かの肺患者らしい若い男は、しげく女の方を見てから、砂山の

方を顧みた。

豊村もやがて裸足で、柔かい砂を踏んで波打際へ寄つた。肺患者の寝た淋しげな姿がことに惻れに彼れの目に映つた。

二人は足の裏を砂で擦ぐられる快い氣持を語合ひながら歩を進めた。汐煙は二人を包んでゐた。

『私汐風をドツサリ吸つて身體を丈夫にしとかなければならない』と、軈江は胸一杯に深い呼吸をして、『私はまだ若いんだから身體さへ丈夫ならば、先きの事を案じて萎れるには及ばないわね』と、自から恃むところがあるやうに云つた。

『人間は粉飾をしなくつても、持つて生れた身體を傷けないやうにすれば自然に美しいんだよ。人間はなぜ衣服なんぞ發明したのだらう。裸體で生れてゐることにしてゐればよかつたのぢやないかと僕は時々思ふことがあるよ。社會だの家庭だのと詰らない窮屈な道を定めなくて、好いた者は好きな者同士で氣儘に生きてゐたらいいんぢやないかな』

『夏だつたら裸體になつてあの波の中へ入つて見るんだけど。歩いてゐてさへこんなに氣持がいいんだから、裸體でこの砂の上を轉げまはつたらどんなでせう』軈江の澄んだ黒瞳は、蒼い波の上に蕩けるやうに注がれた、ドツト強い音を立てゝは碎ける大海の波濤も、彼女には何等の恐怖をも與へなかつた。『面白い海の唄は無いでせうか。あつたら教へて頂

戴な。私唄つて見るわ』

『知らないね』豊村は昔教室で學んだバイロンやコールリジの詩の中に海を讚美したものゝあつたことを臆ろに思出したが、軈江に教へて唄はせるには役立たなかつた。『僕のやうな無風流な職業をしてる人間は、唄も詩も全く分らないんだから駄目さ。だけど、今あちらの夕燒の光つてる方の海を見てると、このまゝ舟に乗つて遠い所へ行つちまつたらいいやうに思はれたよ。人間は時々そんな馬鹿な考へを起したりするんだね』

『馬鹿な考へですつて？ 私も今さう思つてゐたところなの。舟に乗つてあちらの方へ行つて見たいと思つてゐたのよ。……あなたも私も同じことを思つてゐたのね』

『だつて出来もしないことを思つて見たつて詰らないさ』

『なぜ？。出来ないことないぢやないの。本當にさうしようと思つたら、今日にでも明日にでも出来ないことないと私は思はれますよ。あなたのやうな男の人は、智慧があつて物事がよく分るせゐか知れないけど、思切つたことは出来ないものらしいのね。御自分で思ひついたことを馬鹿な考へだなんてケナスのは、頼もしくないやうに私には思はれますよ』さう云つた女の言葉は、不斷の無邪氣な言葉とは違つて、冷やりと豊村の胸に觸れた。氣のせゐか、女の眼差しも今までの無邪氣な柔しさとは違つて、鋭く光つてゐた。豊村は思

はず目を外らした。

なに、軀江がおれの胸の中の暗い思ひを知つてゐよう筈はない。ましておれを唆かさうなんて、そんなふてくしい量見を持つてゐよう筈はないと、彼れは自分の邪推を打消したが、自分の持つてゐる暗い思ひまでもそのために打消されるのではなかつた。

『私の云つたことが氣に觸つたら勘忍して下さいね』

『おれはお前の一生を幸福にしさへすれば、それでいいんだ。外に不平も不満もないんだから、それだけはよく覺えてお呉れよ』

『仰有らなくつてもよく分つてゐますわ』

軀江はさう云つて微笑した。男の心盡しに對して、口先や涙で事々しく感謝の思ひを現はしたりしないのが、却つて豊村をして彼女を可愛く思はせた。

『日が入ると急に寒くなつた』軀江は詠歎するやうに云つて、人家の燈火を顧みた。

二

二人の部屋は下館の二階の一角で、直ぐ下の路は、町の子供の遊び場所のやうになつてゐたが、彼等の喧しい聲も激しい浪の音に壓せられるので、二人の靜居を亂すことはなかつた。障子を開けると、夕暮れの濱へ漁船の引上げられるのが

見られた。

二人は一緒に風呂に入つて來て、月夜の海を見ながら食事をした。豊村は一本の麥酒を飲干した。汐風に乾いてゐた喉には、麥酒の味もよかつたし、動きまはつた後の空腹には新鮮な魚類の味もよかつたが、食膳に向つて箸を執り盃を持つてゐる間は、汽車の中や砂山の上にある時よりも、一層はげしく自分の家庭の有様が念頭に上つて來るのであつた。この頃一日だつて自分の家の食卓で快い食事をしたことはなかつた。病院にある間あるひは書齋に入つてゐる間は兎に角、いやでも妻のかよ子と顔を向合はせてゐなければならぬ食事の際には、神經が鑢やすりか何かでガリガリ磨耗すりへらされてゐるやうに感ぜられた。昔からどちらかといへば陰鬱な方で、手輕ながら晩酌の酒の香も漂つてゐる食卓を快くさせる手腕を彼女は持つてゐなかつたのだつたが、夫の身持について薄々勸付けて來たこの頃は、料理の皿の中にも炊立ての飯の中にも、銚子からうつす酒の中にも、小皿へ滴らす醬油の中にも、氣味の悪いやうな女の恨みが融込んでゐるやうであつた。料理の拵へ振りが存在ぞんざいになつたことは云ふまでもなかつた。そして、食事中に一言か二言、當てこすり染みた不快な口を利くのを例としてゐた。

『そんなにまづさうにして召上らなくなつていゝぢやありませんか』かよ子はつよく云つた。

『わざとまづさうに食べる譯ぢやないよ。おれだつて一日いやな仕事を勤めて来るんだから、晚餐ぐらゐは旨く食べようと思つてゐる。しかし、この頃は辛かつたり甘過ぎたりして、おれの口には旨く食べられないのだ』

『それはあなたが何でも私のすることにケチをつける氣であらうしやるからです。一ころよりも料理には氣をつけてゐるんですけど、それを認めようつていふ誠意があなたに無いから駄目なんです』

『さうかねえ』

あるひはさうかも知れないと、豊村自身もたまに感ずるところはあつたが、料理のことはさうとしても、陰惨な顔付して前に坐つてゐる妻と相對して、どんな料理だつて快く食べられよう筈はなかつた。

かよ子は、まづさうにして食べる夫を非難しながら、自分もいかにまづさうに箸を採つて、しかもわづかしか食物を口へ入れないで箸を擱くことがあるかと思ふと、平生よりも皿數の多い料理を、食べなければ損だといふ風に貪り食ふことがあつた。その時の目は慳貪に尖つてゐた。

『私、今死んぢやならないんですもの』と、ニコリともしないで言譯をした。

勤め人には一日中の一番の樂みである筈の家庭の晚餐を、こんな風で豊村は厭うてゐたが、しかし、口實を設けて外で

食事をする時、ことに、軋江を誘つて鳥屋や洋食屋などの明るい座敷で、小サツパリした食卓に向つて、睦しく快く箸を採り盃を採つてゐる時に、ふとした機會で、かよ子一人で淋しい食事をしてゐる自分の家の茶の間の陰鬱な様が見出されて異様な心苦しさを覺えることがあるのであつた。

多くの婦人患者をたゞの生物としてのみ取扱つてゐるばかりでなく、幾人もの知合ひの女をも、知慧の薄い生物として見て、さういふ者の愛憎好惡に煩はされないつもりである彼れも、妻といふ名で呼ばれる關係があるために、かよ子によつては、日々の生存を悩まされるのが心外であつた。

『お前はヤキモキして無駄に頭を痛めなくつてもいいだらう。一生お前を饑ゑも凍ゑもさせる氣遣ひはないんだから』豊村はある日眞心からさう云つて妻を慰めた。饑ゑも凍ゑもせず、下女一人使つて氣樂に暮らしてゐるかよ子に不平のある筈はないと自分極めにして、彼女の嫉妬を無法な病的な作用と見做しながら、をり／＼妻の歡心を買はうとするやうな口を利くこともあつたが、そんな口を利いた後の氣持の惡さつたらなかつた。

悟られまいとする夫の細心な注意と、祕密の正體を見つけないとする妻の執拗な探索は、半歳あまりも續いたのであつた。職務の都合上歸りの遅くなつた時や宿直の夜など、下女がかよ子の吩咐を受けて病院へそつと主人の在否や行先を索